



食べた“サクランボ”の種飛ばし大会が始まった

事例1

あわしま
粟島(粟島浦村)・新潟県

離島留学の子どもたちが地域の刺激になる。 学びを産業化する小さな島の試み



ココがポイント!

- 高齢化や子どもの減少が悩みだった粟島。平成25年度より離島留学「しおかぜ留学」をスタートさせ小中学校の生徒数を維持。
- 中学校のキャリア教育として実施した島の特産品を使ったアイスクリームが高評価。農家、島内外の企業を結び付けるきっかけに。
- 漁業・観光の主要産業に「学び」をプラス。学びを産業化し3つの柱の相乗効果を狙っている。

新潟県の北部、日本海に浮かぶ小さな離島粟島(粟島浦村)には海を望む場所に馬の牧場があります。その牧場で、軽トラの荷台に乗り「うわー渋いー」と言いながら頭上の桜の実を次々に食べる子どもたち。サクランボといっても食用の品種ではなく、普通の桜の実なのですが、そんなことはお構いなし。実は、この無邪気にはしゃぐ子どもたちは生粋の島っ子ではなく、この島に留学のためやって来たのです。

島が抱える人口減少・高齢化問題

粟島は新潟県村上市の岩船港から普通船で90分、高速船で55分の距離に位置し、東西4・4km、南北6・1km、自転車なら3時間で1周できるくらい小さな島で、全域が県立自然公園に指定されるほど豊かな自然に恵まれています。主な産業は漁業と観光業。日本海の荒波は島に複雑な岩礁をつくり、そこに多くの魚がやってきました。この魚を狙って、沿岸では明治時代から続く「大謀網漁」という大型の定置網を使った漁が行われています。

島を訪れたときは、ちょうど午後の魚が終わったところで、漁協前の港に停泊している漁船には大漁旗が掲げられていました。粟島では鯛が有名ですが、6月には本マグロも水揚げされます。獲った魚はすぐに漁協で手際よく箱詰めされ、最終便の普通船で本土に送られていきました。

島が一番活気づくのは夏。定期的に訪れる釣り客も多くいますが、夏となれば県内外から多くの海水浴客で島

が活気づきます。

しかし、近年は粟島も他の離島と同様に人口減少と高齢化に悩まされており、平成7年に474人いた島民は、平成22年には366人に減少しています*。加えて、観光客数も年々減少しています。主要産業の一つである観光の衰退や高齢化に伴い、民宿の廃業や漁業に従事する人も減少しています。



漁船の竿の先には大漁旗



粟島名物料理わっぱ煮。曲げわっぱに焼いた魚と熱湯、味噌を入れてから赤くなるまで焼いた石を入れると一気に沸騰し香ばしい香りが立ち込める。最後にネギとお酒で仕上げる豪快な漁師料理。



民宿や料理屋の人たちが直接漁港に買い付けにくる。漁港が一気ににぎわう。



*国勢調査人口より



17時の清掃。サクランボを食べるのに夢中になっていた子どもたちは、時間になるとピタッとやめ、誰に言われるでもなく率先して自分たちの仕事をする。馬糞は農家の人たちが肥料にしたいと希望してくる。



牧場の目の前は海。冬は厳しい寒さだが子どもたちは休まず馬の世話をしている。

地域コミュニティの核となる 学校に活気を取り戻す

栗島では、高齢化以上に子ども数の減少を深刻な問題と捉えています。島には小中学校を統合した栗島浦村小中学校がありますが、生徒数の減少が続ぎ、学校存続に危機感を募らせていました。そこで栗島では地域の「コミュニティ活性化のためには学校の存在は大きいと考え、平成25年度から「しおかぜ留学」という名称で離島留学をスタートさせました。

「現在、留学生は13名。留学は1年間が基本ですが、中には2年3年と続ける子もいます」と教育委員会教育長 川村三千男

さんは語ります。本年度は、イターンで島に来た家族の子どもも含めて在校生は27名になりました。

新生入生に感想を聞くと、「忙しい学校」という声が多く聞かれます。4月に入学してすぐ、5月に行われる島開きに向けて「島コンソーラン」という踊りを覚え、その後も体験学習・クラブ活動などの学校行事や島の行事への参加もあり、1年間の行



栗島浦村 本保建男村長

事は目白押しです。しかし他では体験できないことができることに子どもたちは楽しんでいきます。

さらに留学生には牧場での作業も加わり、大切な役目です。登校前の朝6時半にエサやりなどをし、一度寮に戻ってから学校へ行き、放課後も牧場での作業があります。

「毎月1回、牧場や寮、校長先生など留学に携わる人たちと会議を行い、子どもたちの様子の確認や今後の方針などを決めていきます。昨年度は3学期だけ担当制を導入し、自分が担当する馬のエサやりから調教までを行うようにしたところ、自分がやらなくてはという意識がさらに高まり、馬への観察力もアップしたそうです」（川村教育長）。

子どもたちへの教育が地域の刺激に

馬の飼育を始めたのは、昭和の初めまで島に野生馬が生息していたことから、もう一度島の馬を復活させようという思いがあったのですが、馬を世話することにより子どもたちの「命の教育」にもなっています。

「栗島では漁業と観光だけではなく、3つの柱として『学びの産業化』を進めています。単



栗島浦村教育委員会
川村三千男教育長

に島に来て学校に通うだけでなく、地域の人と関わり、仕事を手伝いながら地域の課題を解決していくことで、この3つの柱が結び付き、地域の活性化につながると考えています」と本保建男村長は語ります。

その成果の一つが、中学校のキャリア教育の一環として平成27年から3年計画で実施しているアイススクールの開発です。当時、島に派遣されていた地域再生マネージャーが中心となりスタートしたこのプロジェクトは、この島だけで作られている大豆「一人娘」を使うことで、中学校と農家を結び付け、さらに島外の生協や菓子メーカーなど島内外を巻き込んだ一大プロジェクトとなりました。

「商品完成時には新潟県庁で知事への贈呈や記者会見も行い、子どもたちにはとても良い経験になりました。最初の年はパッケージや味を決め、販売方法を決めるだけでなく実際に販売体験も行いました。2年目には大豆も栽培し、さらに本年は製造・加工の体験もさせようと思います」（川村教育長）。このアイススクリームは反響を呼び、大豆の生産を増やす農家も出てきて、島の新たな名産品として今後も販売する予定です。また、来年度も新たに島の生産物を使ったキャリア教育をスタートさせる予定です。

「学び」と元気になる そんな島にしていきたい

微増とはいえ島の人口が増えたのは留学制度が要因の一つといえます。子どもたちが増え



島の大豆「一人娘」を使ったもう一つの人気商品「煎り豆」

「ばっけ屋」のスタッフ。同店では地域おこし協力隊を中心に、島の人たちとさまざまなアイデアを出しながら商品を開発。

「将来は、島で学んだことを社会に役立てられるような人材を輩出することで、社会の役割を果たす地域になりたい。栗島の自慢はお年寄りです。気さくで優しく情が深い。接することで若者はその縁を大事にし、さらにお年寄りも若い人から学ぶこともあるでしょう。そうやってみんなが学ぶことで元気になって欲しいです」(本保村長)。

留学を終えた子どもたちの中には、島に帰ってくる子もいるそうです。人と人との結びつきが大きな効果をもたらす、小さな島の大きな挑戦は、離島が抱える問題の解決策を導き出しているのかもしれない。

※平成27年国勢調査人口より

「島ではいま、さまざまなプロジェクトが並走しています。地域おこし協力隊が中心となって島の特産品を直売する『ばっけ屋』では、新たな島の商品を開発しています。地方創生の核は「まち・ひと・しごと」ですが、私はここに学びを加えたいと思っています。島全体で学んでいくことが目に見えない効果となって、島の人の目覚醒を促すと期待しています」(本保村長)。

目下の島の悩みは住宅問題です。現在は家が足りなくて下宿している人もいるほどで、本年は4棟の村営住宅を建設予定です。

「ばっけ屋」でも大人気のアイスクリーム。このパッケージイラストを描いたのは、アイスクリーム開発当時中学2年生だった留学生の女の子(写真右)。最近島に遊びに来た際に商品宣伝用のイラストも描いてもらったそう。



栗島で出会った人々

ゲストハウス「おむすびの家」



青柳花子さん



保育士として島にやってきて3年、島で人々が集まる場所を作りたいという思いから昨年9月にゲストハウス「おむすびの家」を開業しました。「開業する前は、すぐに辞めたりしないか何度も島の方に確認されました。オープンしてからは、1日目は民宿に泊まったお客さんが、2日目はうちに泊まるという話を宿の方にすると、『花子のところか、行ってこい!』と言われることもあるそうです。お客さんから『ここに泊まるだけで島の人に受け入れてもらえるようだ』と言われるととても嬉しいです。まずはこのゲストハウスを続けることが大切と考えます。島へ来る人を増やすためにも、続けることで、好きな地域で暮らしたいという人を助けられるようになります」

あわしま自然体験学校

シーカヤックのプロガイドを育てるために、鹿児島県種子島から本年5月に栗島へ移住。「栗島は海の透明度が高く、アイランドパークとしてのポテンシャルが高いです。さまざまな技術をしっかり習得させるのが私の役目と思っています。さらに、その習得した技術を使って、人材や技術を他の地域に派遣させることも視野に入れていきます」



臼井章裕さん

あわしま牧場



羽下直子さん

責任者の羽下直子さんは診療所の看護師さんでもあります。もともと馬が好きで、看護師募集とともに馬の世話もできると聞いて栗島へ移住。「新しく入ってきた子は先輩に教わりながら馬の世話をしています。子どもたちは本当に成長が早く、みんな使命感と責任感をもって仕事しているんですよ」



兵庫県出身で留学生の柳谷駿斗君は現在中学3年生。地元で乗馬クラブに入っていたほどの馬好きで、馬の世話ができるということで栗



柳谷駿斗君

島にやってきて3年目です。「この島はとてものんびりしていて、島の人たちはみんな優しいです。それに馬の世話が毎日できてうれしいです」

栗島浦漁業協同組合

組合員110名のうち、実際に沖に出る人は60~70人。その大半が50~60代と漁師の高齢化が問題となっています。「人数が少ないので、大規模な漁は3つあった定置網を今は2つにしています。最近、新たに35歳の子が入ってきましたが、あと5~6人は必要です。“定置がなくなると栗島もなくなってしまう”その思いがあります。なんとか人数を増やし漁獲量を増やしたいです」



脇川忠一
業務課長